



TITLE:

図書館は学生の現在(いま)にどう応えるか？
: 変わりゆく「学び」と大学図書館<京都大学図書館機構平成23年度第1回講演会>(スライド: 学生の学習・生活実態と求められるアクティブラーニング / 溝上慎一)

AUTHOR(S):

溝上, 慎一; 竹内, 比呂也

CITATION:

溝上, 慎一 ...[et al]. 図書館は学生の現在(いま)にどう応えるか? : 変わりゆく「学び」と大学図書館<京都大学図書館機構平成23年度第1回講演会>. 2011

ISSUE DATE:

2011-10-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/147322>

RIGHT:

学生の学習・生活実態と 求められるアクティブラーニング

溝上 慎一

(京都大学高等教育研究開発推進センター／教育学研究科)

<http://smizok.net/>

E-mail smizok@hedu.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

本日の話

- ①なぜアクティブラーニングなのか
- ②なぜ学生の学習・生活実態を把握する必要があるか
- ③学生の学習・生活実態
- ④アクティブラーニング

本日の話

- ①なぜアクティブラーニングなのか
- ②なぜ学生の学習・生活実態を把握する必要があるか
- ③学生の学習・生活実態
- ④アクティブラーニング

「教える」から「学ぶ」へ

From Teaching to Learning

- 近年の大学教育改革における世界的な流れの一つに、「教える (teaching) から学ぶ (learning) へ」をスローガンにした授業・カリキュラム改革がある。
(cf. Barr & Tagg, 1995)
- 教員は何を教えるかではなくて、学生が何を学んだのかを指標として、FDや教育改善をおこなう。

<p>1. 知識・理解</p>	<p>専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解するとともに、その知識体系の意味と自己の存在を歴史・社会・自然と関連付けて理解する。</p> <p>(1)多文化・異文化に関する知識の理解 (2)人類の文化、社会と自然に関する知識の理解</p>
<p>2. 汎用的技能</p>	<p>知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能</p> <p>(1)コミュニケーション・スキル（日本語と特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができる） (2)数量的スキル（自然や社会的事象について、シンボルを活用して分析し、理解し、表現することができる） (3)情報リテラシー（情報通信技術（ICT）を用いて、多様な情報を収集・分析して適正に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる） (4)論理的思考力（情報や知識を複眼的、論理的に分析し、表現できる） (5)問題解決力（問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を確実に解決できる）</p>
<p>3. 態度・志向性</p>	<p>(1)自己管理能力（自らを律して行動できる） (2)チームワーク、リーダーシップ（他者と協調・協働して行動できる。また、他者に方向性を示し、目標の実現のために動員できる） (3)倫理観（自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる） (4)市民としての社会的責任（社会の一員としての意識を持ち、義務と権利を適正に行使しつつ、社会の発展のために積極的に関与できる） (5)生涯学習力（卒業後も自律・自立して学習できる）</p>
<p>4. 統合的な学習経験と創造的思考力</p>	<p>これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力</p>

知識習得の場としての大学



知識習得の場
＋
知識活用能力(基礎力)養成の場

アクティブ
ラーニング
(AL:Active
Learning)

本日の話

- ①なぜアクティブラーニングなのか
- ②なぜ学生の学習・生活実態を把握する必要があるか
- ③学生の学習・生活実態
- ④アクティブラーニング

3つのポリシー

- ①アドミッション・ポリシー(入学者受入方針)
- ②カリキュラム・ポリシー(教育の実施に関する方針)
- ③ディプロマ・ポリシー(卒業認定・学位授与に関する方針)

中央教育審議会『我が国の高等教育の将来像(答申)』(2005年1月28日)

ラーニングアウトカムズ・学士の質保証(1/2)

直接評価:

ラーニングアウトカムに直接関わる部分。その最小単位は個別授業で学生の作業、発表、試験、レポート等を通じての理解度・達成度の学習評価。

間接評価:

アンケート調査やインタビューなどによって調査されるもの。3つのポリシーに則った学生の教育・指導ができているかの成果エビデンス

→IR (Institutional Research、機関調査)を含めた内部質保証の動きとして展開

知識習得の場としての大学



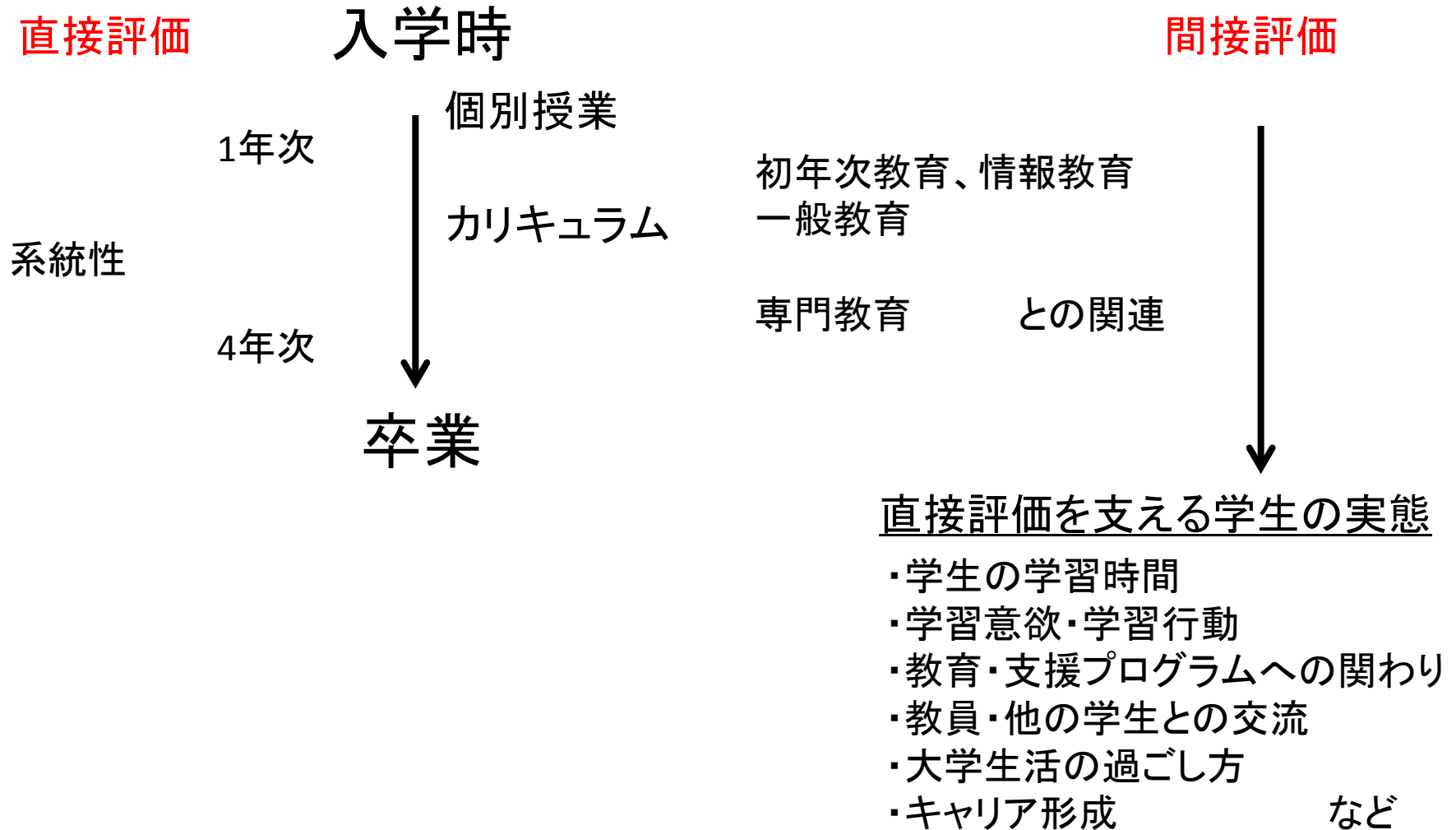
知識習得の場
+
知識活用能力(基礎力)養成の場

アクティブ
ラーニング
(AL:Active
Learning)

+市民としての社会的責任

+生涯学習者

ラーニングアウトカムズ・学士の質保証(2/2)



本日の話

- ①なぜアクティブラーニングなのか
- ②なぜ学生の学習・生活実態を把握する必要があるか
- ③**学生の学習・生活実態**
- ④アクティブラーニング

『大学生のキャリア意識調査』

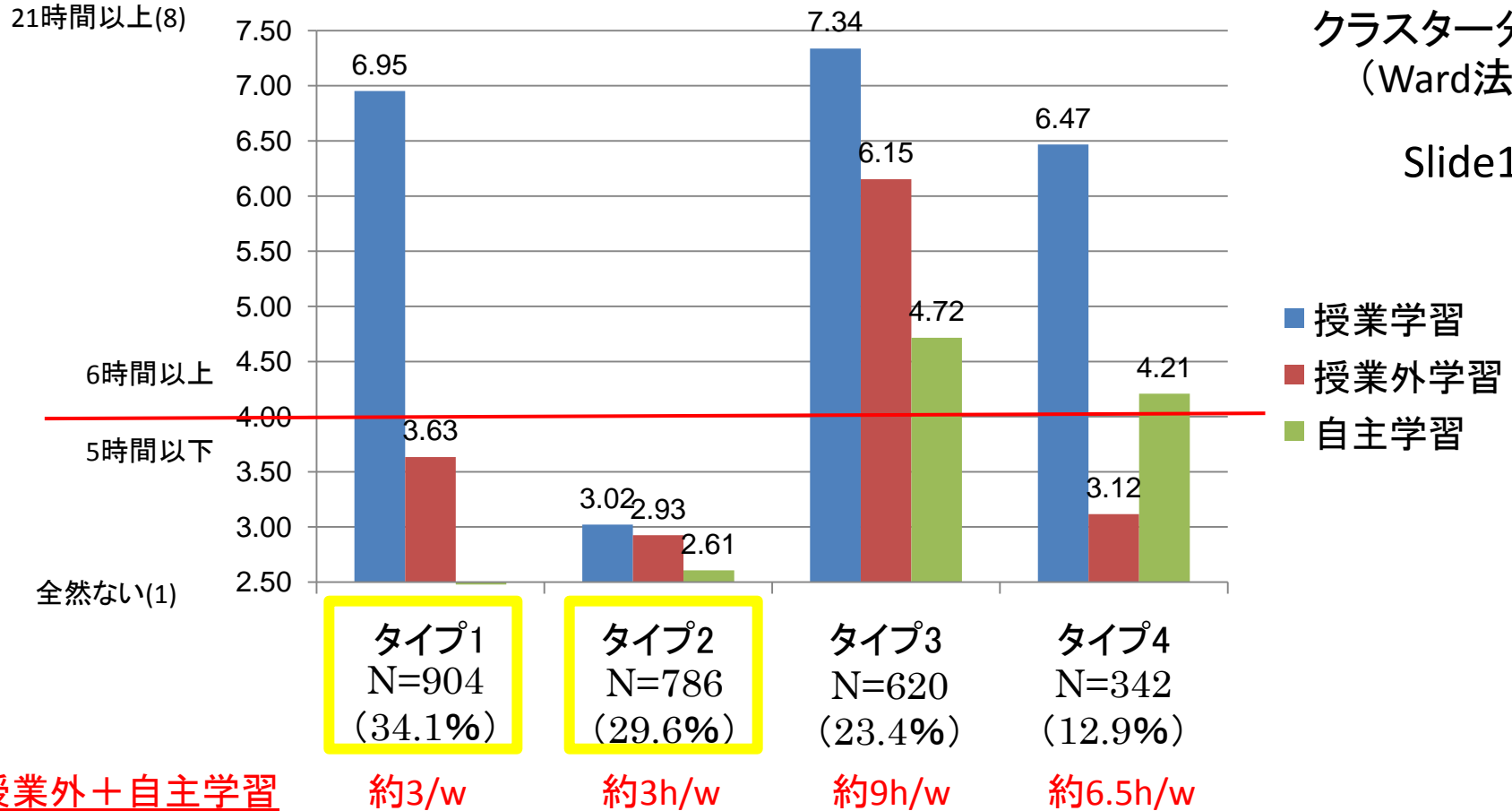
<http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/research/>

- 主催：
京都大学高等教育研究開発推進センター・
（財）電通育英会
- 電通リサーチ（2007）、マクロミル（2010）によるインターネットリサーチ。
- 回答者：
2007年調査：全国の国公立私立大学生2,013名
（1年生988人、3年生1,025人）
2010年調査：全国の国公立私立大学生2,652名
（1年生1,328人、3年生1,324人）
- 調査時期：
2007年11月、2010年11月に実施。

授業・授業外・自主学習時間から「学習タイプ」を作成

クラスター分析
(Ward法)

Slide14



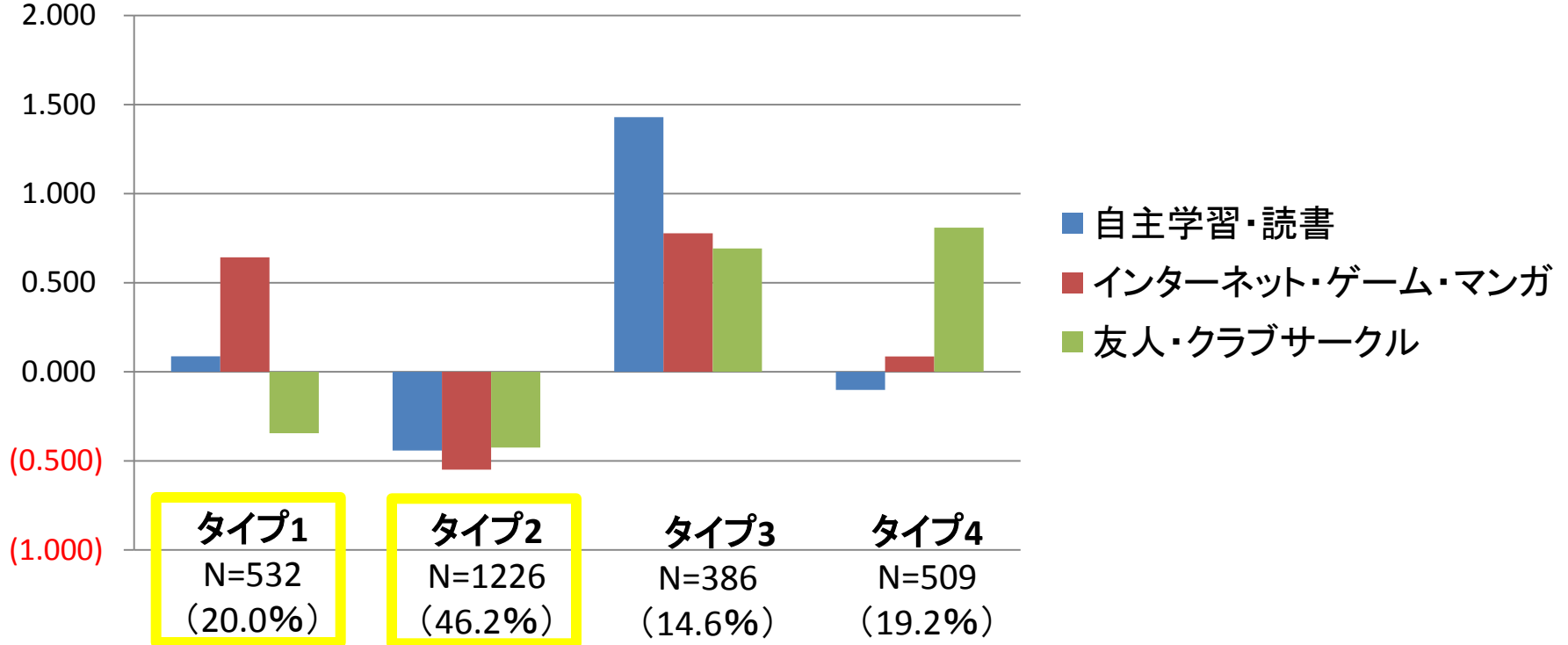
1週間の平均的な活動時間

- (1)全然ない (2)1時間未満 (3)1-2時間 (4)3-5時間
(5)6-10時間 (6)11-15時間 (7)16-20時間 (8)21時間以上

もっとも多いのはタイプ1(授業学習中心)と
タイプ2(学習していない)(計63.7%)

1週間の生活から「学生タイプ」を作成

クラスター分析(Ward法)

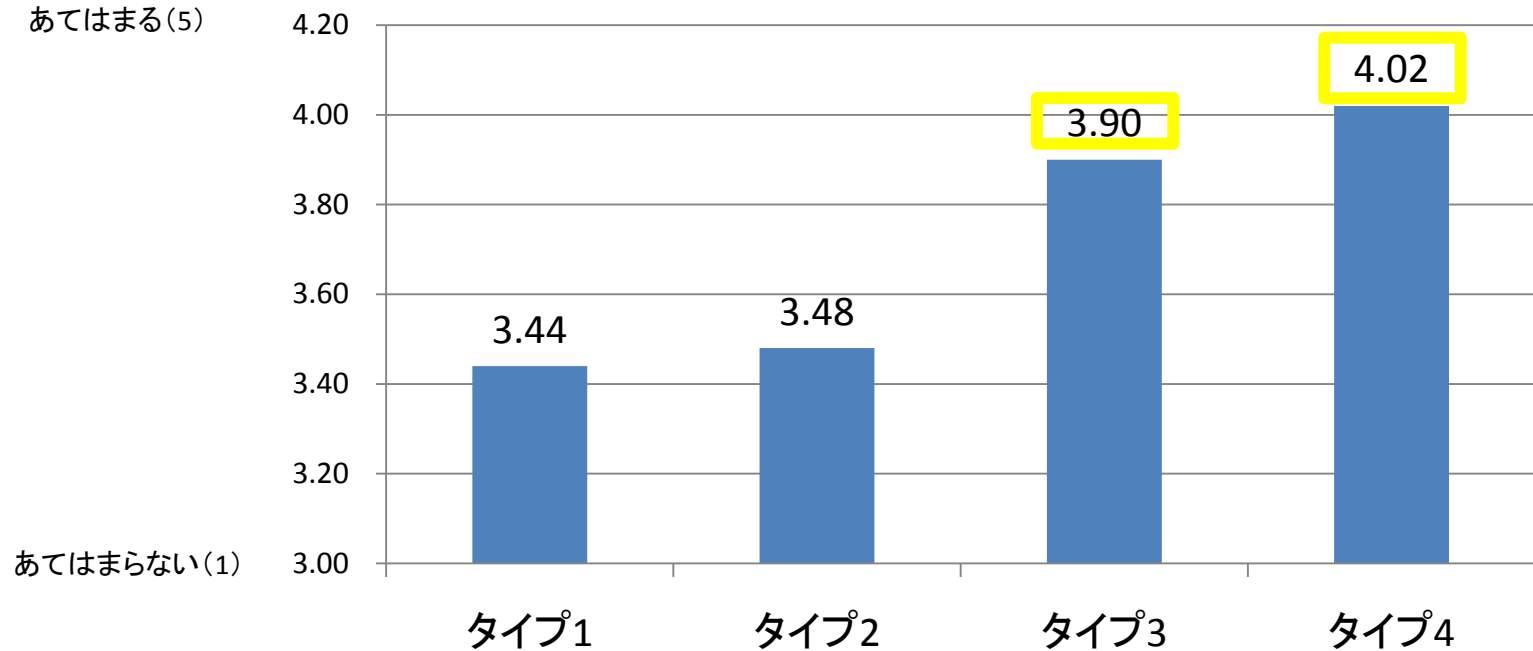


1週間の平均的な活動時間

- (1)全然ない (2)1時間未満 (3)1-2時間 (4)3-5時間
(5)6-10時間 (6)11-15時間 (7)16-20時間 (8)21時間以上

もっとも多いのは不応型タイプのタイプ1とタイプ2(計66.2%)

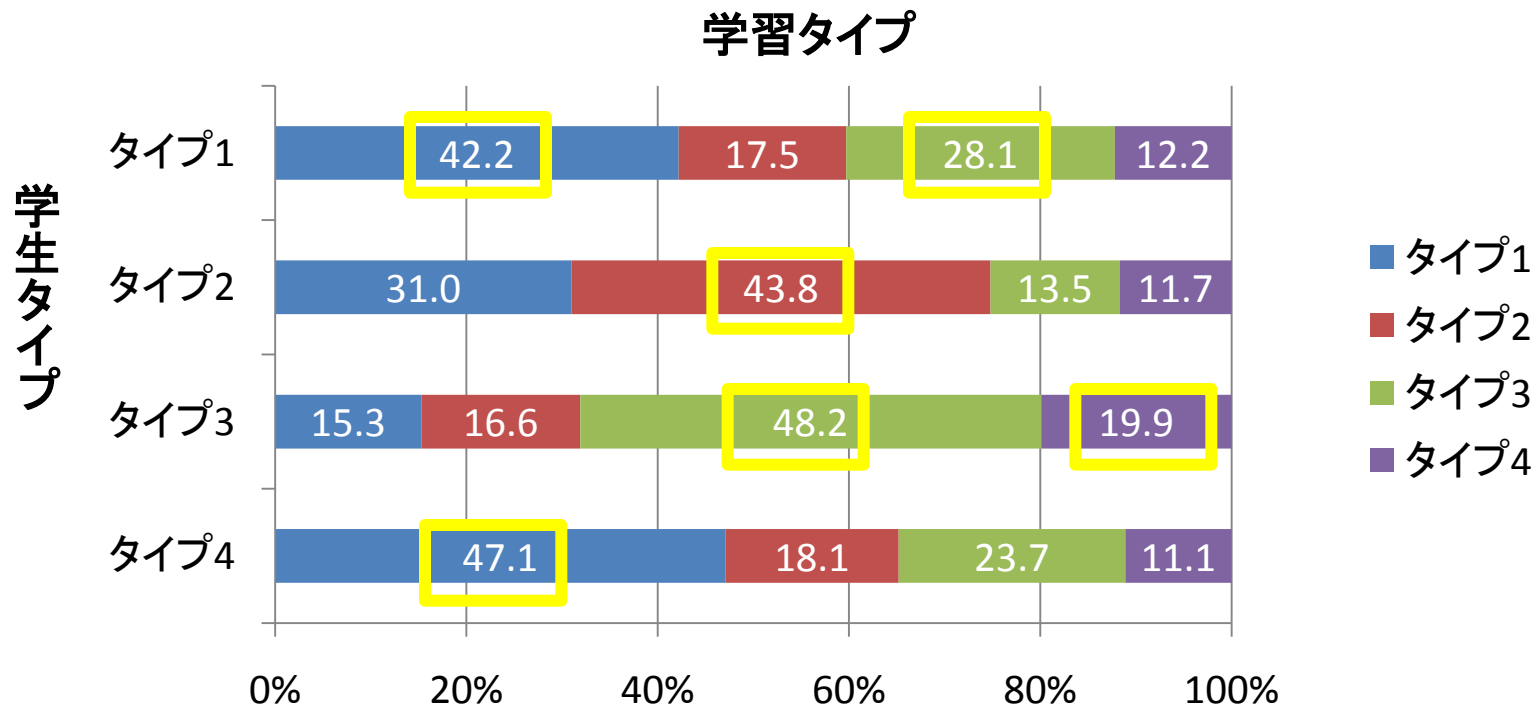
「学生タイプ」× 充実感



(*) χ^2 検定の結果、0.1%水準で有意差あり(F (3, 2648)=46.130, $p<.001$)。多重比較(Tukey法)の結果、タイプ4, タイプ3>タイプ2, タイプ1。

充実感が高いのはタイプ3、4。
両タイプの間には有意差なし。

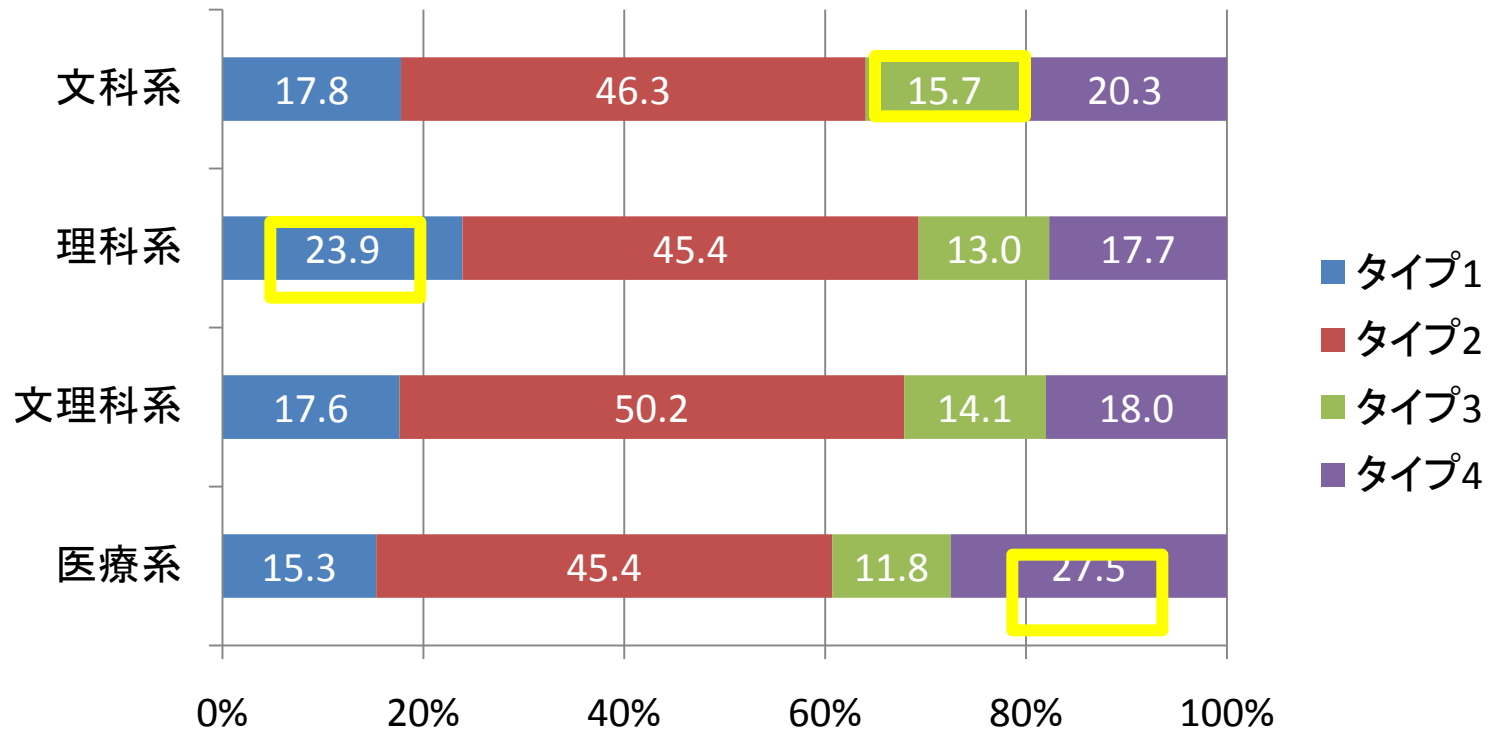
学生タイプ(1週間の過ごし方) × 学習タイプ



(*) χ^2 検定の結果、0.1%水準で有意差あり($\chi^2(9)=409.928, p<.001$)

学生タイプ3は授業外・自主学習をおこない、
学生タイプ4は授業中心の学習をおこなっている

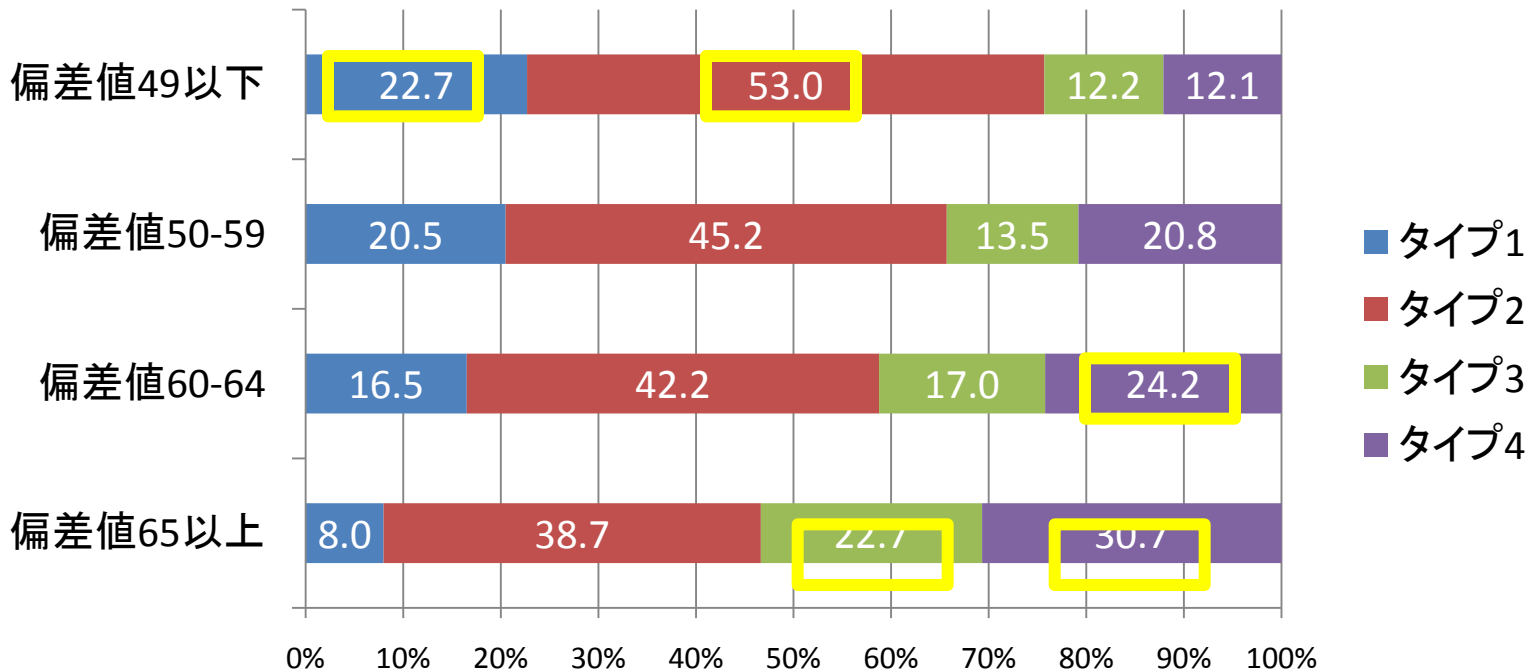
専門別に見た「学生タイプ」



(*) χ^2 検定の結果、1%水準で有意差あり($\chi^2(9)=26.649, p<.01$)

文科系にはタイプ3が、理科系にはタイプ1が、
医療系にはタイプ4が多い

偏差値別に見た「学生タイプ」



(*) χ^2 検定の結果、0.1%水準で有意差あり($\chi^2(9)=82.887, p<.001$)

(**) 大学偏差値は、代々木ゼミナールの入試難易度大学ランキングの偏差値 (<http://www.yozemi.ac.jp/rank/daigakubetsu/>)を参考にして作成された。

タイプ1・2が多いのは偏差値49以下、
タイプ3・4が多いのは偏差値65以上

全国の旧帝大生・京大生の授業学習時間 (16時間以上/週)

		全国の旧帝大生 (京大生を除く)*	京大生**
1	全然ない	6 (2.1)	10 (0.9)
2	1時間未満	3 (1.0)	6 (0.5)
3	1～2時間	5 (1.7)	16 (1.5)
4	3～5時間	23 (8.0)	66 (6.1)
5	6～10時間	19 (6.6)	134 (12.4)
6	11～15時間	51 (17.7)	228 (21.2)
7	16～20時間	73 (25.3)	266 (24.7)
8	20時間以上	108 (37.5)	352 (32.7)
合計		288 (100.0)	1078 (100.0)

62.8%

57.4%

(*) 秦由美子科研(2006年実施)、2年生(N=329)だけを抽出して再分析

(**) 山田礼子科研(2005年実施)、京大生2年生(N=1091)を抽出して再分析

全国の旧帝大生・京大生の授業外学習時間 (5時間以下/週)

		全国の旧帝大生 (京大生を除く)*	京大生**
1	全然ない	6 (2.1)	31 (2.9)
2	1時間未満	21 (7.3)	111 (10.3)
3	1～2時間	52 (18.0)	221 (20.5)
4	3～5時間	85 (29.4)	328 (30.4)
5	6～10時間	61 (21.1)	206 (19.1)
6	11～15時間	31 (10.7)	69 (6.4)
7	16～20時間	4 (1.4)	33 (3.1)
8	20時間以上	29 (10.0)	81 (7.5)
合計		289 (100.0)	1080 (100.0)

56.8%

64.1%

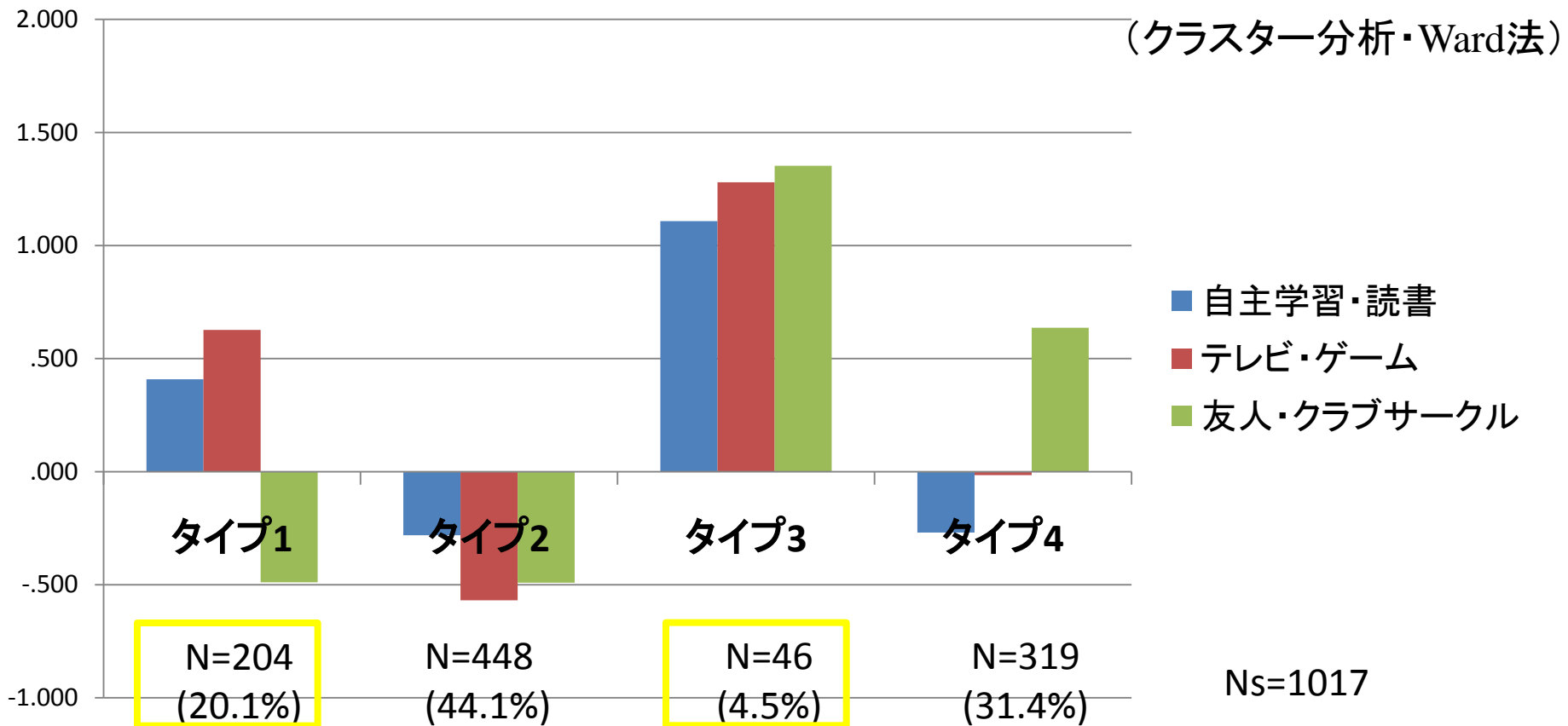
(*) 秦由美子科研(2006年実施)、2年生(N=329)だけを抽出して再分析

(**) 山田礼子科研(2005年実施)、京大生2年生(N=1091)を抽出して再分析

京大生タイプ

(『京大広報』No.641 2009.1)

*図は改訂



自学自習タイプ1・3で計24.6%
成長タイプ3は4.5%程度

本日の話

- ①なぜアクティブラーニングなのか
- ②なぜ学生の学習・生活実態を把握する必要があるか
- ③学生の学習・生活実態
- ④アクティブラーニング

アクティブラーニング(AL)とは

- 「アクティブラーニングを取り入れた授業」のように、授業者からの一方向的な知識伝達型授業(学習者の受動的な学習)ではなく、学習者の能動的な学習を取り込んだ授業形態(教授法・授業デザインなど)を特徴づける包括的用語
- 高次の認知活動(理解・記憶・再生・論理的/批判的/創造的思考・推論・判断・意志決定・問題解決など)からアウトプットにつながる過程のあらゆる活動
 - e.g. 現象やデータを解釈・情報検索/収集
 - 議論・討論 問題発見・問題解決
 - 分析・評価 成果レポート/発表

さまざまなAL型の授業

□ 学生参加型授業

e.g. コメント・質問を書かせる/フィードバック、理解度を確認(クリッカー、授業最後/最初に小テスト/ミニレポート)

□ 各種の共同学習を取り入れた授業

e.g. 協調学習/協同学習

□ 各種の学習形態を取り入れた授業

e.g. 課題解決学習/課題探求学習/問題解決学習/
問題発見学習

□ PBLを取り入れた授業

e.g. Problem-Based Learning / Project-Based Learning

AL型授業の質を高める装置(授業)

- ❏ 書く・話すというアウトプットの活動(コメント用紙、レポート、ディスカッション、討論、プレゼンテーションなど)
- ❏ さまざまな他者(学生同士、教員、専門家・地域住民など外部者など)の視点を取り入れ、自己の理解を相対化させる
- ❏ 宿題・課題を課す(授業外学習)
- ❏ 新たな知識・情報・体験へアクセスさせる(調べ学習、体験学習)
- ❏ リフレクション(形成的・総括的評価)
- ❏ 多重評価(小テスト、発表、質問、プレゼンテーション、学生同士のピア評価など)

知識を基盤とするALの授業システム

□ 北米の講義＋演習の授業システム

表 3セメスター単位の例

月	水	木
講義1h	講義1h	演習1h

知識習得の場としての大学



知識習得の場
＋
知識活用能力(基礎力)養成の場

アクティブ
ラーニング
(AL:Active
Learning)

知識習得の場としての大学



知識習得の場

+

知識活用能力(基礎力)養成の場

アクティブ
ラーニング
(AL:Active
Learning)

私の授業では...



大講義では (100人以上)

- ❑ 教科書の予習・復習(とくにディスカッション前、最終レポート前)を前提とする
- ❑ 最後の30分は毎回ミニレポート
- ❑ 2回はディスカッションを入れる
- ❑ 「もっと学習したい人のために」(文献)を用意する。

小規模の 講義では (30-50人)



- 10分(質問への回答)
- 50分(講義)
- 30分(ディスカッション)
- 宿題:ミニレポート(講義内容とディスカッションのまとめ)を次週に毎回提出

まとめ

①なぜアクティブラーニングなのか

知識活用能力(基礎力)養成の場

②なぜ学生の学習・生活実態を把握する必要があるか

3つのポリシー／ラーニングアウトカム・質保証

③学生の学習・生活実態

大半の学生は授業学習のみ／あまりにも短い授業外学習時間

④アクティブラーニング

定義／さまざまなアクティブラーニング型授業／北米の講義＋演習の授業システム

- 📄 結果レポート随時更新『大学生のキャリア意識調査』
See <http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/research/>

参考文献

- 📄 溝上慎一 (2006). 大学生の学び・入門—大学での勉強は役に立つ！—. 有斐閣アルマ.

【関連】「授業学習・授業外・自主学習」「2つのライフ」を学生にいかに日常課題とさせるかを説いた本。初年次教育テキスト。



- 📄 溝上慎一 (2010). 現代青年期の心理学—適応から自己形成の時代へ—. 有斐閣選書.

【関連】青年期の現代への変貌を歴史的・社会的に概説しつつ、学習や2つのライフが、大学生にとっていかに現代的な青年期課題になっているかを説明したもの。

